

08

August
2026

[月刊] キリスト教書評誌

本のひろば

HON-NO-HIROBA

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2026年8月1日発行(毎月一回1日発行)

第824号

出会い・本・人

人間解放の教育 岡田 仁

特集シリーズこの三冊!

聖書を通読したいのに聖書で遭難しそうになっている人のための、この三冊! 佐々木潤

本・批評と紹介

近藤勝彦 著

活けるキリストの現実 藤掛順一

加藤常昭 著

ハイデルベルク信仰問答講話 郷家二三

芝 恭子 訳著／芝恭子著作集編集委員会編

楓の記憶、紡ぐ言葉 水谷 悟

富田正樹 著

戸惑いながら信じてる50 塚本潤一

菊地 順 著

十字架の言葉 森島 豊

田澤 薫 著

子どもの主体を育む保育 田中かおる

久野 牧 著

神の目にあなたは貴い 佐々木潤

洪 伊杓 著

帝国の神道とキリスト教 李 元重

ミロスラフ・ヴォルフ 著／彦田理矢子 訳

排斥と抱擁 長下部穂

グラント・ワッカー 著／相川裕亮、田中稔十 訳

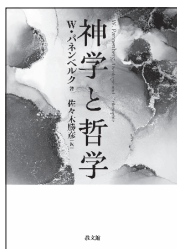
ビリー・グラハム 大宮有博

教文館創業140年
記念限定復刊!



ギリシア語新約聖書釈義事典〔全巻セット縮刷版〕
H・バルツ、G・シュナイダー〔編〕 荒井 献、H・J・マルクス〔監修〕
新約聖書本文に現れる全ギリシア語語彙の文脈的・歴史的・神学的意味を解き明かす比類なき事典として、刊行以来多くの方々にご愛用いただいたきたロングセラーを小型化・軽量化。

●A5判・1788頁・定価69,300円



神学と哲学

W・パネンベルク〔著〕 佐々木勝彦〔訳〕

神思想と世界概念の共属性を明らかにする

三一論、創造論、受肉などの神学的主題は、哲学的にどのように論じられてきたのか? 自然科学的世界観に基づく現代に、キリスト教的神理解はなぜ必要なのか? 20世紀を代表する神学者が、未来の神学と哲学の進むべき方向を指示す。

●A5判・420頁・定価6,380円



キリスト教神学の200年

福音と文化をめぐる一つの旅行記

H・ベルコフ〔著〕 渡部 満〔訳〕

福音と近代思想は共存できるか?

哲学と神学の緊張、自由主義神学と正統主義神学のせめぎ合い——ドイツやオランダのみならず、英国、アメリカ、さらにはカトリック神学までを視野に収めた、近代神学200年の全体像。

●A5判・488頁・定価6,930円



人間解放の教育



岡田 仁

神学生だった頃、釜ヶ崎でのボランティアに明け暮れていた私の心に、忘れたくない一冊があります。神田健次先生が紹介してくださった、文東煥^{ムン・ドンファン}著『人間解放とキリスト教教育』です。

その後、水俣でのフィールドワーク、佐世保の教会、富坂キリスト教センターでの働きを経て、いまは大学でキリスト教科目を担当しています。いくつかの現場で、人が尊厳を奪われていく「非人間化」の現実にふれてきた者として、若き日に本書と出会えたことを、あらためて感謝しています。

韓国の軍事独裁政権下で社会的不正義のただ中で生き、人間が人間として生きることの難しさを身をもって経験した著者は、人間を解放へと導く教育こそがキリスト教教育の中心であると語ります。主イエスは、人を悪の力から解放放つ「解放の主」であり、人が自由な存在として生きられるよう目覚めさせる「解放の教育者」でもある。ゆえに、近代化の中で周縁へ追いやられた一人ひとりの人間を、福音の光のもとで再び立ち上げ

らせることこそ、教育の大切な使命だと強調します。

「いつの時代であっても、教育とはその時代の『非』を指摘しつつ、新しい可能性をもつ明日を招来しうる創造的参与者を育てねばならない。」（文東煥）

キリスト教教育とは、知識を伝えるだけではなく、人が神の歴史に参与する主体として立ち上がることを支え、共に学び、対話し、連帯していく営みです。いまの日本に求められているのは、沖縄・奄美を含むアジアの文脈の中で、平和と和解へと向かう「悔い改めの教育」であり、人間とすべての被造物の解放を目指す教育ではないでしょうか。

学生たちには、良き師や友、そして人生を照らす書物と出会いながら、自分自身の歩みを形成してほしいと願っています。

（おかだ・ひとし 明治学院大学教員・日本基督教団牧師）



▼シリーズ この三冊！

聖書を通読したいのに聖書で遭難しそうになっっている人のための、この三冊！

佐々木潤

(ヨシヤ・じゅん・日本基督教団武蔵野教会牧師)

もし、無人島に一冊だけ本を持っていくなら、「聖書」にしよう。デフォールの小説に出てくるロビンソン・クルーソーも、実在したクワイ河収容所のアーネスト・ゴードンも、聖書を読んだ。そして立ち直って、生きた。やはり聖書は「いのちのことば」なのだ。

身近なところにもいる。洗礼を受けるまでの、ほんの1年足らずの準備期間に2度も通読した人がいて、試問会の席で長老たちを平身低頭させた。新改訳を13回読んだ人、新共同訳を40回

読んだ人、聖書協会共同訳を9回読んだ人も知っている。読み通したことをみな笑顔で楽しそうに話す。しかもドヤ顔ではないのだ。イヤミがないのだ。清々しいのだ。日常いろいろ大変なことがあるはずなのに、心の芯に幸福を宿しているように見えるのだ。

詳しく書くと個人が特定されて差し障りがあるのだが、ふだんから我がままと毒舌で周囲を辟易させていたおじいさんが、あるとき重病で入院し、退屈で絶望的なその期間、病室で聖書を

通読した。それと関係あるかどうかは誰も実証できないのだが、その間に彼は主治医も不思議がるほどの完全治癒を体験し、ついには人柄もすっかり清まって退院してきて、人々を唖然とさせたのである。

そういう証人たちに雲のように囲まれているので、いざ自分が始めてみると、あれあれ、どうして、なかなか読み終われない。私たちの間で「聖書通読」は「挫折」の代名詞にもなっているのだ。読み始める決心の真実は、神と人の前に偽りないもの、だったはずなのに、毎年初めに「創世記」1章を開き、そしていつしか、多くの通読者が消息を絶つ難所と名高き「レビ記」に没する。この短い旅をいつた何度くりかえしたことだろう。

なぜ、とまる?? やはり難しい??

この現象は他の書物では起こらない

特殊なことに思える。本誌を愛読するほどの読書好きで、大著も読破してきただ人ほど、かえってその経験がアダになっていないのだろうか。読めばわかる、これも読んでモノにしたい。感動したい。そういう人にとって聖書は手ごわい。今までと同じようににはわからないのである。他の書物のようにいかないのである。読めてもわからないのである。いったい自分はいま何を読んでいるのだろうか、何がわかったら「わかった」ことになるのだろうか、そこがわからなくなるのである。一生の問いである。

このように苦しみあえぐ人たちのために編み出された数々の力作の中から私が勝手に選んだ3つを世に出た順にご紹介したい。

まずは、『聖書人物おもしろ図鑑 旧約編』。関わったのはソウソウたる

顔ぶれ。あの日本キリスト教団出版局から満を持してカラー印刷で世に送り出されて、いまや誉れ高い名著である。

この本で最大の貢献をしていると思われるのは、イラストの金斗鉦さん。この人が描いた、息をのむほどに壮大な聖書物語の光景の名画の数々が、惜しげもなく縮小されてあちこちに使用されているばかりか、この本の目的である、聖書に登場するキャラクターたちの顔が、何の根拠もないのに本人によく似ているかもしれないと思わせる味わいあるタッチで描かれている。子どもどころ読破した『プロ野球図鑑』か、うちの子どもが座右の書にしていた『ポケモン図鑑』を思い出させる。人物の基本情報は簡潔で手堅い。(例)「ヨブをなぐさめにきたけど、最後には責めてしまったお友だちのみなさん」(47頁)、「ヨナタン 好物…ハチミツ」(56頁)。地図も充実。そして何

といっても重宝するのは系図。

石ころのようにもみえる無味乾燥なカタカナの名前が続く荒れ野を行くときも、この図鑑を手にして進めば、聖書人物がみな立ち上がり、動き回っている、その賑わう世界に入り込んで聖書が読める。北へ、南へ、また北へと振り回されながら読む「列王記」も、王の名前と系列が一目でわかる。レビヤタンとベヘモットまで、きっちり解説されているぞ。今回は本欄の数に入れなかったが、後発の姉妹編である「新約編」も好評。

では2冊目『1冊でわかる聖書66巻 十旧約続編』。小友聡、木原桂二共著、これも日本キリスト教団出版局から。

「創世記」「出エジプト記」と各巻もれなく、という書なのか、いったい何を言いたくて書かれているのか、どこが読みどころなのか、これをたった

2、3ページでまとめている。その配

分は長大な「イザヤ書」も、マイナーな「ナホム書」「ハバクク書」も、「ローマの信徒への手紙」も「フィレモンへの手紙」も公平。短いから読み疲れない。これを読んでから聖書を読んでもいいし、聖書を読みながら、これを開いて、また聖書に戻ってもいい。

多くの通読者は「出エジプト記」後半で、もがいている。特撮映画の見せ場で盛り上げておいて、ここでもなぜ律法？ このあたりのこともちゃんと見通しよく案内してくれる。

「レビ記」も、「おもしろくないなあ」と心に思っている口に出せないでいるモヤモヤに共感してくれていて、コツも教えてくれて、うれしい。「幕屋での祭儀」の煩瑣な規定に一貫する「礼拝の神学」を読み解きながら、私たちの毎日曜日の礼拝にも引き寄せ、霧が晴れるようなアドバイスがあるか

ら、これで「レビ記」が読めるぞ。

執筆者のお二人は難しいことをいっぱい研究しては成果を挙げてきた博士たちなのに（だからこそというべきか）その見識のこなれ方に胸を打たれる。聖書が教会でどう読まれてきたのかという視点で案内してくれる、聖書への入門書であり、教会への入門書でもあり、この世でみことばに生きることへの入門書でもある。

さっき紹介した本も、こちらの本も「旧約統編」までカバーされている。ちよつと代金を上乗せして統編付き聖書を買った人たちはいるものの、うちの教会では統編を使わないので、買ってよかった、という声を聞かない。統編にどんな気持ちで踏み込んだからいいのか、心構えもできないで、うろろろしている人、きつと役に立ちます。

さて、いよいよ3冊目。『聖書通読

31』。いつもどこかに執筆なさった文章が活字になっている石田学氏が送り出した本書は、日本キリスト教団出版局から刊行された「31」シリーズもののおそらく最後の1巻である。良書を生み続けながらも大赤字を抱えてついにこの春には悲しき「整理」の憂き目に遭った同出版局への敬意をここで表したい。聖書を読みたいと思っているのに手引きがなければわからないよと嘆いて、ひとり馬車で旅するエチオピアの宦官に伴走して励ますフィリポのような書が途絶えないようにと切望するものである。

この本が出たとき書名を見た家人は「ええつ、1か月で聖書を全部読めるの??」と声を挙げた。もしかして同じ誤解をした人がずいぶんいるのではなからうか。いやいや、これは「31日間」で聖書が通読できる本」ではなく、



『聖書人物おもしろ
図鑑 旧約編』

大島 力：監修
古賀 博、真壁 蔵、
吉岡康子：編
金 斗鉉：イラスト
日本キリスト教団出版局
2015 年刊
四六判
112 頁
1,650 円

聖書の中から31カ所を選び出し、黙想と祈りで、聖書全体を読むおもしろみとてくれる本である。

本書は聖書に「神の救いの歴史」という一貫したテーマを追っている。「人間から救いが来ることはない」「人からではなく」という句も対照として繰り返し返される。あの「レビ記」からも19章1-4節「聖なる者となりなさい」が選り出されていて、短い黙想の

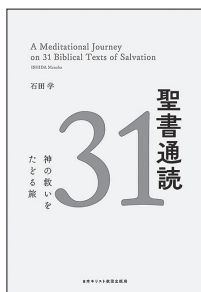


『1冊でわかる聖書
66巻+旧約統編』

小友 聡、木原桂二：著
日本キリスト教団出版局
2023 年刊
四六判
192 頁
2,200 円

中に用語解説もあり、旧約の物語の前と後ろを見渡す。「神の形であるキリスト」（フィリピ）と「神のかたちであるキリスト」（コロサイ）、区別つきますか。

それぞれの最後には大きな文字で「祈り」が記されている。声に出して読んでみてください。このような祈りへと導くようなことがその聖書箇所には書かれていたのだ。祈りから聖書へ、



『聖書通読 31——神の
救いをたどる旅』

石田 学：著
日本キリスト教団出版局
2025 年刊
四六判
144 頁
1,760 円

聖書から祈りへ。それが起るとき聖書を読めているのだ。聖書がわかるとは、神がわかることだから。そして、「だから私たちは生きていける」ということがわかる。聖書の最終巻にあるように、パトモス島に流されたあの人、だから生きた。そして私たちに書き送ったのだ。

真の「現実」とは何か？ 「真理」とは何か？

〈評者〉 藤掛順一

近藤勝彦先生は、二〇二一、二二年に『キリスト教教義学（上・下）』を上梓された。本書は主にその後執筆された十二の論文や講演を収録したものである。

第一章「『現実』とは何か」にこのようにある。「信仰に生きることは、決して非現実的になることなく、『復活のキリストの実在』の信仰によって、生ける神の働きによる『真の現実』に即し、真に現実的に生きることである」。復活のキリストの実在、つまり「活けるキリストの現実」こそ「真の現実」であり、それに即して生きることこそ真に現実的な生き方なのである。

「活けるキリストの現実」は生ける神の働き（御業）による現実である。第三章「『神の御業』（Magnalia Dei）の神学」にこうある。「それゆえ神学は、ただ単に神の言葉の神学ではないであろう。そうでなく、神の言葉の神学は



活けるキリストの現実
キリスト教神学講演・論文集
近藤勝彦著



また神の偉業・大業の神学、Theology of Mighty Acts: Theology of Magnalia Deiでもある。そうでなければ、イエス・キリストの十字架と復活に基づく神学ではあり得ないであろう」。

近藤先生は『キリスト教教義学』において、イエス・キリストの十字架と復活による「活けるキリストの現実」の中で歴史を解釈することに取り組まれた。本書の第五章「『勝利者キリスト』をめぐって」にもこのようにある。「しかしもう一つ求めたいことは、歴史における『復活のキリスト』の『勝利』を指し示すことを含む歴史解釈である。（中略）歴史の悲惨や人間の誤りをイエス・キリストの十字架の死のもとに見ながら、キリストの復活の勝利の光のもとに歴史における神の勝利の兆しを見逃さないことも重大であろう。十字架にかかられた方は勝利者だからで

ある」。活けるキリストの現実、即ちキリストの復活の勝利の現実とは、本書に収録されている論文や講演の「すべてを貫き、根本のテーマをなしている」（「あとがき」）。

本書は、二〇二四年十二月に、四年に及んだ闘病の末に天に召された静子夫人の記念とされている。「はじめに——夕暮れになっても光ある現実」は、夫人の病が明らかになったことを受けて記された文章である。

「人生の夕暮れにあっても、活けるキリストを仰ぐとき、今、すでに、終末時の光ある現実に対する幾分かの参与の中にある。今、仰いでいるお方が、活けるキリストだからである」。

「わたしたちはこの終末論的二重性を持った『光ある現実』の中に、すでに生かされている。それが活けるキリス

トの實在を今身近に仰ぐ信仰の日々である。『光ある現実』は、復活者イエス・キリストがわたしたちと共におられる現実にはかならない」。

本書は『キリスト教教義学』の理解を側面から助ける充実した神学講演・論文集だが、それだけでなく、近藤勝彦先生が静子夫人と共に、活けるキリストの實在を身近に仰ぎつつ、「夕暮れになっても光ある現実」を歩まれた、その信仰の告白なのである。

（ふじかけ・じゅんいち）日本基督教団横浜指路教会牧師

（A5判・二二八頁・定価三三〇〇円・教文館）



いっぽん指で弾く 礼拝讃美歌伴奏集

西村ひかり＊編／菱田麻耶＊編曲



シンプルなメロディーだけの楽譜に、音符が読めない人のためのドレミを振っている。オルガンを弾いたことがない方にこそ、この楽譜集をすすめてほしい。礼拝の流れを考えた13曲で礼拝奉仕ができる。

A4判・並製本
定価 2,200 円 [本体 2,000 円 + 税] 円
ISBN978-4-86325-175-5



株式会社 一麦出版社

札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888

<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

福音の急所を学ぶために！

〈評者〉 郷家 一二三



ハイデルベルク 信仰問答講話

加藤常昭著



本書はキリスト教のラジオ放送F E B Cの「聖書をあなたに」で語られた講話である。一九八五年に企画され、放送後に上下二巻で出版され、三四年が過ぎた。今回、新装合本版として表紙は新しくされた。手にして読み出すと、信仰の本質を問いかけてくる迫りと、それに明確にこたえる言葉とが、新鮮に響いてくる。私にとって、この三十年間、本書は座右の書であり、説教準備のたびごとに読んできた。新装合本版となって、重く真つ白な新本を手にする、講話を語られた加藤常昭先生の声が聞こえてくるような思いになる。

「ハイデルベルク信仰問答」と初めて出会ったのは、説教塾の学びの場であった。問一の「ただひとつの慰め」を知った喜びは忘れられない。すぐに牧会で用いようとして、いろいろな試みては失敗を繰り返してきた。二十年前の教

会の研修会では抜粋版をつくり、集中して学んだ。求道中の父と母が参加してくれて、その後、洗礼を受けた。私は新しく目が開かれた喜びを感動して語っていた。コロナ禍で教会の礼拝者が減り始めた時は、礼拝を五回に分け、説教は短く語る中で、この問答を週報に掲載し、恵みを知ってもらおうとした。しかし今思うと聞き手に届かなかったし拒まれた。「研修内容が難しい」「今日の説教テキストと関連がない」「学校の授業のようだ」。感激のあまり安易に紹介した自分の愚かさを知った。

本書で、著者の加藤先生の語り方はわかりやすく説得的である。ラジオに耳を傾ける聴き手を想像し、テキストを持たない人でも、その心に届くように、分かりやすく心を込めて語り掛けている。「あなたに」届けたい思いと配慮にあふれている。特に最後の祈りは、聞かれた人の心に生

田矢廣司 [著] 四六判・一九二頁・一八七〇円

遠藤周作が森田ミツに語らせた神学

寂しさと痕跡を通して語りかける神。その足跡を遠藤文学に訊ねて。森田ミツは「わたしが・棄てた・女」のヒロインであるばかりでなく、遠藤文学に様々な形をとりながら繰り返して立ち現れてくる。そこに作家のキリスト教信仰が到達した独自の神学が内包されているのではないか——と自の視点から考察された意欲的論考。説教4編付き。

田矢廣司 遠藤周作が森田ミツに語らせた神学

話題の新刊

広瀬由佳 [著] 近刊 新書判・三三八頁・一六五〇円

神のいのちの物語

山崎ランサム和彦氏推薦 本書は単なる抽象的な神学書ではありません。語られているのは、「神の物語」であるとともに、自身も弱さをかかえ、傷つき悩みながら神のいのちに生かされ、他者を生かす人生を追求している一人の信仰者としての著者自身の物語です。…… 結末に至っていない、未完の物語です。

神のいのちの物語

反響

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税別込)

まれてくる神への求めを執り成すようにして祈られている。多くの人は自分の祈りとして「アーメン」と祈ったと思う。放送後の反響は大きく、二冊の書物として発行された。

今回、その二冊を新装合本版として教文館が出版した意図は何だろうかと考えている。加藤先生が召されて二年たつ。先生との車中での会話を思い出す。コロナ後の教会の衰退傾向に対して、何とか回復を目指して励んでいるが、なかなか難しいと、諦めかけていた私に、最後にぽつりと言われた。「日本の教会はコロナに勝てるだろうか」。

信仰の恵みを明確に言い表す説教と福音理解が今求められている。日本と世界は、生死を貫いてキリストのものとされている唯一の慰めを知らない。混乱の根本にある人間の罪の惨めさを知らない。人々は老いも若きも、人生に

とって不可欠な福音の真実を聞きたがっている。「急所」という言葉が繰り返される箇所がある。問四五の復活の箇所と、問五三の聖霊の箇所にもある。今年のイースターとペンテコステでは、主イエスの復活と、聖霊なる神について、問答を引用して説教した。説教に教理的な背骨が与えられ、明確な説教となった。今こそ福音を、はつきりとした言葉として受け取り、心に届くように語り告げる時が来ている。

本書を書斎に、カバンに、座右に備え、そして講壇においては著者の語りの声に学んで、福音をすべての人の心に届け続けたい。

(こ)や・ひふみ日本ホーリネス教団坂戸キリスト教会牧師
(B6判・五五〇頁・定価四九五〇円・教文館)

母校の「魂」を伝える 翻訳・研究・教育のバトン

〈評者〉 水谷 悟



楓の記憶、紡ぐ言葉

来日カナダ婦人宣教師報告資料
の翻訳と東洋英和女学院での幼
児教育

芝 恭子 訳著

芝恭子著作集編集委員会編



サトウカエデはカナダの国樹。「楓」とは、カナダ婦人宣教師M・カートメルが一八八四年に創立した東洋英和女学校を指す。一昨年に『東洋英和女学院140年史』を監修・執筆したことが導きとなり今回の機会を賜った。日本近現代史を学ぶ者として批評を加えつつ内容を紹介したい。

訳著者の芝恭子（一九三二―二〇二四年）は同短期大学保育科で婦人宣教師から薫陶をうけ、霊南坂幼稚園で働き、カナダ・米国学を経て幼児教育と音楽教育の連携を研究し、母校の保育者養成に尽した。退職後に「応答の責任」を感じ同僚らの共同研究に参加し、カナダ・メソジスト婦人宣教師団の年次報告を翻訳した。本書はその軌跡である。

第1章は婦人伝道会社の年次大会議事録（一八九七―一九二五年）より抜粋した東京・静岡・甲信越の幼児教育に関する報告の翻訳。時代思潮が欧化主義から国粹主義へ変

わる中で偏見と闘い、様々な教育の実践を試みた宣教師たちの姿が立ち現れる。幼稚園の必要に気づいて幼児向けクラスを開き、親への伝道も含め「幼い人たちの間で永遠に続く仕事だと確信」する。これが上田幼稚園、上田保姆伝習所、東洋英和女学校附属幼稚園師範科へと結実していく。

第2章は日本幼稚園連盟の年次報告書（一九〇七―一九二五年）より抜粋した関連資料の翻訳。各地の幼稚園からの報告に訳者の本領が発揮される。イエスの復活を語る少女の舌足らずな言葉が母親を礼拝に導く話、吹雪の日の誕生日会に雪まみれになっても子供を背負い登園する親の姿、ヨシコさんと祖父の会話など、当時の様子が伝わってくる。特に子供たちの発する自然で率直な言葉に臨場感が溢れる。

一方、幼稚園教師の養成機関が不足するも、関係省庁は幼児教育の専門性を重視せず、日本の慣習に囚われ子供を

半人前と見る機関も多かった。ゆえに人々は子供を一個の人格として扱う幼稚園に感銘を受け、わが子を預けた。

第3章は上田保母伝習所で幼稚園教師養成を始めたデフォルテ手書きの遺稿や信濃部会に関するスクルトンのメモなどの翻訳。宣教師たちの意志と戦略を捉える「補助線」となる。また、宣教師志願者に対する一五の質問は見開き右頁に原文も示され、訳文と照合できる。宣教師に求められた姿勢・能力・経験などの条件を窺い知ることができる。

第4章は著者の研究三点。「1. 音楽教育における MUSIC MAKING のこころみ」は、幼児教育と音楽教育をつなぐ主要テーマ。学生一人ひとりが神経を研ぎ澄まし環境の中にあるリズムや音を感じ取り、「楽器を用いて一連の流れを持つ音楽に変えて再生を試みる」表現活動を分析する。幼児の創造性を伸ばすには、「私たち自身の全人格も向けなければ、その願いは達せられない」との言葉にめざす教育の本質が示されているよう。

第5章は母校に列なる宣教師や卒業生を扱った文章四篇。最後の「特別寄稿」では、自身が短大の入試面接でキリスト教との関係を問われ、「これからです。これから一生懸命に」と勇んで答えたことを明かす。日々の学業と礼拝を通じてイエスが幼子を慈しむ姿に「保育者にとって必要な

知識と実践の原点」を見出し受洗。以来四〇余年、信仰者・教育者として導かれてきたと証し、卒業生・教員として「母校の魂」を伝える責任を痛感して止まない」と締め括る。

先達の魂を受け継ぐには何が必要なのか。本書は現代の社会で疎かにされている行為の尊さを教えてくれる。

(みずたに・さとる 静岡文化芸術大学教授)
(A5判・三三六頁・定価二九七〇円・教文館)

大予言!! 『その3』は必ず出る!!

〈評者〉 塚本潤一



戸惑いながら信じてる 50

新キリスト教入門 2

富田正樹著



富田正樹著『戸惑いながら信じてる 50』——新型キリスト教入門 その2』は、前作『疑いながら信じてる 50』からわずか二年半で刊行された続編である。しかし本書は、単なる第二巻ではない。前作がキリスト教への親しみやすい入口だったとすれば、本書は、その入口からさらに奥へと読者を導いていく一冊である。

著者自身、前作刊行時、装丁に「その1」と記されているのを見て、「え？第二巻を書くことになるのか」と戸惑ったという。しかし考えてみれば、「戸惑いながら信じてる」という題名は、著者自身の現在地でもあるのだろう。本書には、簡単に答えの出ない問題と向き合い続ける、一人の教育者であり牧会者である著者の姿が率直に刻まれている。

本書で扱われるテーマは重い。「死刑」「人工妊娠中絶」

「安楽死」「臓器移植」「トランスジェンダー」「原発」など、現代社会に生きる私たちが避けて通れない問題ばかりである。しかも著者は、それらを単純な正義やわかりやすい結論へ回収しない。ここに本書の最大の魅力がある。

現代日本では、宗教はしばしば「正解を与えるもの」と受け取られやすい。しかし本書が行っているのは、その逆である。拙速な答えを提示するのではなく、「なぜこの問題に戸惑うのか」を読者と共に考えようとするのである。その姿勢は、キリスト教を知っている読者だけでなく、「自分は無宗教だ」と考えている人々にも開かれている。

著者は長年、キリスト教主義学校の教壇に立ちながら、同時に教会で牧会にも携わってきた。本書には、その二つの現場で積み重ねられた思索と対話の経験が流れ込んでいる。難解な問題を各章わずか教員に整理しながらも、読者

を置き去りにしない。その語り口は平明だが、背後には相当な学問的研鑽が感じられる。

特に印象深かったのは、「イスラエルとパレスチナの対立をどう考えるのか」という章である。読者によつては、「そこから議論を始めるのか」と感じるかもしれない。しかし著者は、あえて安易な「正解」を提示しない。「自分で掘り下げ、自分で考え、自分で答えを探していく」—その教育者としての姿勢が、本書全体を一貫して貫いている。現代は、SNSや短い言葉によって、複雑な問題にも即座に「賛成か反対か」の態度表明が求められる時代である。しかし本書は、そのような時代の空気に抗うように、「簡単に答えの出ない問題の前で立ち止まること」の大切さを語っている。だから本書は、単なるキリスト教入門書で

はない。「共に考えるとはどういうことか」を問い直す、一冊の対話の書でもある。本書を読み終えた時、読者の中に残るのは、「理解し終えた」という感覚ではなく、「考え始めた」という感覚だろう。それこそが、この本の持つ力なのだと思う。

そして本書三十三頁には、「疑いながら信じる」「戸惑いながら信じる」「悩みながら信じる」、それが信仰の実態なのだ、という趣旨の言葉が記されている。であるならば、このシリーズには、おそらくまだ続きがある。第三巻の題名は、きっと『悩みながら信じてる50』である。そんな予感を抱かせるところにも、本書の大きな魅力がある。

(つかもと・じゅんいち 日本基督教団北六甲教会牧師)
(四六判・二一六頁・定価一五四〇円・ヨベル)

ヨベルの既刊 / 重版案内



重版 忽ち

戸惑いながら信じてる50 富田正樹 [著]

新型キリスト教入門2

格調は低く、ハードルと「ロザシ」は、いや増しに高く！ 原莞、臓器移植、デザイナー・ペビー等、社会の諸問題に聖書からの直接の回答を得ることができる。どうしたらいいか。このさらなる難題に牧師とみティが挑んだ第2弾！

四六判・二〇八頁・一五四〇円



3刷 待望の

疑いながら信じてる50 富田正樹 [著]

新型キリスト教入門1

「疑いながら信じる」以外の信じ方って、ある？ できる？ 私は疑いながら信じています。キリスト教を信じる人たち(クリスチャン)の中には疑いなど全く抱かずに、まるっきりに無邪気に信じ込んでしまっている人がいます。それはそれで結構……どう展開する!?

四六判・一九二頁・一五四〇円

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp

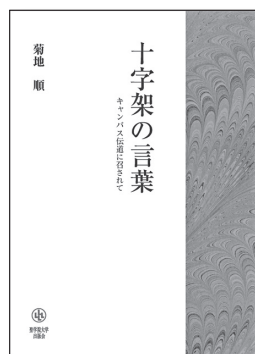
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F

TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858

出版の手引き / 呈 (税込)

存在を肯定する福音が 響いている

〈評者〉森島 豊



十字架の言葉
キャンパス伝道に召されて
菊地 順著



本書は単に読むだけで終わらせるべきではなく、著者をキリスト教学校に招き、学生たちにぜひ直接語っていただきたい、そう強く感じました。「如何にすれば福音に對して明確な決断ができるように語ることができるか」(四二二頁)。その問いに對する応答が本書全体に貫かれています。

本書には、四〇年にわたり伝道者として歩み、そのうち三〇年間をキリスト教学校のチャプレンとして献げてこられた著者の経験と神学が凝縮されています。第Ⅰ部ではキャンパス伝道に向き合う姿勢と方法論が示され、第Ⅱ部ではその実践としての奨励や講話があり、第Ⅲ部にそれを支える神学的な論考が収められています。なかでも、学生たちに向けて語られた数々のメッセージは深く心に響きます。なぜならば、若者たちが抱える問いや葛藤を丁寧と言

語化し、その問いに応答する聖書の言葉を、自然に受け止められる言葉で語っているからです。

特に印象深いのは、著者が世の不条理と真正面から向き合っている点です。東日本大震災をはじめ、若くして命を失った学生たち、社会に起こるさまざまな人災や災害に對し、著者は目を背けません。神義論的問いに對し、著者は「十字架の言葉」をもって応答します。その姿勢を最も鮮やかに示しているのが、礼拝メッセージ「答えから生きる」(一七八頁以降)です。高度に神学的でありながら、驚くほど平易な言葉によって、人生とイエス・キリストを新たに見つめ直させてくれます。どのメッセージにも一貫して「十字架のキリスト」が響いています。

また著者の言葉には、人間の心を鋭くえぐり出す力があります。しかしそれは単なる断罪ではなく、読者自身が納

得しながら罪の現実を受け止められる語りです。たとえば「妬み」をめぐる、「エンビイー」と「ジェラシー」の区別から語り起こし、ギリシャ語の考察を通して、聖書全体が「妬み」に満ちた物語であることに気づかせます（四三頁以降）。その物語は、読者自身の現実を映し出す鏡のように響き、克服への道が語られるとき、自然と神へと目を向けさせています。

著者が学んだ大木英夫先生は、伝道者に「日本を神学する」ことを求めましたが、その視点は本書にも鮮明に表れています。たとえば、日本映画には主人公の死をもつて終わる作品が多いことに触れながら、「滅びの美学」と言われるような日本人特有の美的感覚」（二二〇頁）を指摘し、それが「死への誘いになってしまふ危険性がある」と述べ

ます。そして、それに対して「生きること」を肯定する感覚を持つことの大切さを訴えかけます。このメッセーじは、不安定で揺れ動きやすい現代の若い世代にこそ深く響くものであり、そこで語られる聖書の言葉は力強い説得力を持つています。

テイリツヒ神学を土台に据えつつ、キング牧師の信仰理解に深く共感し、「存在を肯定する福音」を見いだそうとする本書には、現代日本のキリスト教会が必要としているものが豊かに詰まっています。現代において福音をどのように語るべきかを模索するすべての人に、ぜひ手に取っていただきたい一冊です。

（もりしま・ゆたか＝青山学院大学教授・大学宗教主任）
（A5判・四三五頁・定価六四九〇円・聖学院大学出版会）

神学ダイジェスト140号

急速な変化を遂げる現代社会。その中にある、多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

2026年6月発行
A5版120頁
定価638円（税込）

特集 今日のカトリック倫理神学

AI技術の規制―執事としての管理責任―
倫理的行為者としての集団

秋葉 悦子

良心と根本的選択

教皇フランシスコの技術主義パラダイム批判

J・F・キーン

AI倫理学のために

竹内 修一

性に関する罪と聖体拝領

W・オニール

古代イスラエルにおける民主化プロセス

R・W・マケロイ
P・シャーツ
K・シムミート

上智大学神学会

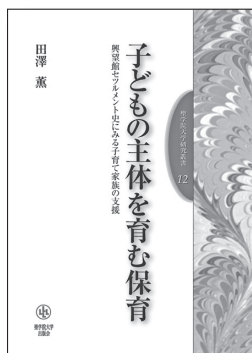
神学ダイジェスト編集委員会

東京都練馬区上石神井4-32-11
〒177-0044 Tel & Fax (03) 3594-4349
E-mail shing-dt@netjoy.ne.jp

人間の豊かな主体形成をめざす

希望の二冊

〈評者〉田中かおる



聖学院大学研究叢書12

子どもの主体を育てる保育

興望館セツルメント史にみる

子育て家族の支援

田澤 薫著



本書は、「保育とは何か」という問いに対して、その書名が示す通り、保育とは「子どもの主体性を育む保育」であるべきだと主張している。著者、田澤薫氏は、昨今の日本の行政の子育て支援新制度や保育の無償化、こども家庭庁発足など、子どもを取り巻く制度が大きく揺れているなか、一連の少子化対策は、「子育てする側」の便宜に偏っていることを指摘し、そうではなくて「子どもの側」に立って人間の育ちということを社会が考えていくべきだという視点に立っている。そもそも「人間は社会的な生き物」であり、親子の関係性だけでなく「保育の力が加わり専門職である第三者が介入」（二頁）することが、豊かな人間の育ちに不可欠だと言う。これは「保育とは何か」を考える時に大事な視点だと筆者も考える。保育は「家庭保育を代行する一面」と「親とは異なる専門職が子どもの育

ちを支える一面」との双方が揃って「子育て支援」となる（二頁）と、著者は主張する。これは一定時間帯の子育てを代行する物理的な支援（数量的対策）と、子どもの内面にかかわる親子に対する精神的な支援との両面が必要だと主張でもある。

この視点に立った上で、もうひとつの課題「保育（保護）か？」「教育か？」についても、著者はこう説明する。「社会事業や福祉的な視点をもった保育は、幼児教育を含む」（三〇一頁）。つまり、日本においては、「保育（保護）」と「幼児教育」は、異なる制度と機関によって二元化されてしまったが、本来は、「子どもの側」に立てばその両方が必要なことである、との見解である。この双方の要素が取り入れられた「保育」の具体例を、著者は「興望館セツルメント」の取り組みに見出している。

それは、膨大な資料に裏打ちされた示唆に富んだ分析である。興望館は一九一九年に日本基督教婦人矯風会外人部関東部会が設立し、東京の「最も悲惨な地域」で活動を始め、関東大震災後の移転（現在の墨田区京島）、長野県軽井沢への疎開を経て、社会福祉法人興望館として現在も事業を継続させている。この興望館における活動は、終始、子どもも大人も「主体的な参加」が特徴である。例えば、保育日誌には、幼児の主体性が尊重され、自ら考えたり活動したりすることを評価する記述（二一〇頁）が多々みられるし、（現在のPTA活動とは違って）保護者の活動も、あくまで自由参加であった（三〇二頁）ことが記録されている。興望館の「保育日誌」を著者は丹念に読み解いて、興望館の保育は「貧困地域の活動」であったが、その内容

は、養護の部分と幼児教育の部分をあわせもっていたことを発見している。また、興望館の保育はキリスト教宣教師とその妻たちの「関与」を受けつつ、主にキリスト教主義の女学校卒業業者や保育者養成校・機関で訓練を受けた保育者が担っていた。それは、「子どもが神と直に向き合う構図において子どもに一人の人格として立つことを求めている」、「子ども自身の内面に拠って立つものが在ることでは、子どもの主体は育まれ得る」（三〇二頁、傍線筆者）と考えられた教育の展開となった。それが「興望館の保育事業の基盤を成す」と分析している。ここに著者の非常に緻密な資料分析と深い洞察による「過去からの新しい発見」の成果が読み取れる。本書は希望の一冊である。

（たなか・かおる 日本基督教団安行教会牧師）

（A5判・三〇七頁・四九五〇円・聖学院大学出版会）



神の目にあなたは貴い

ユースにおくる／生きるための道しるべ

久野牧*著
HISANO Nozomu



混沌の度合いが深まり、平和や自然の破壊が深刻さを増し、さらにAIがさまざまな領域で力を発揮する時代の中で、なお神の言葉（聖書）に聴き続けることはどれだけの意味があるのか？本書はその問題意識に立って、ユースに向けて語りかける小説教集である。

A5判変型・並製本
定価 1,980 [本体 1,800 + 税] 円
ISBN978-4-86325-173-1



株式会社 一表出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

神さまから肯定されていること を肯定して生きる

〈評者〉 佐々木潤



神の目にあなたは貴い
久野 牧著



「私のしていることは、今あなたには分からないが、後で、分かるようになる」(ヨハネ13・7。三番目の説教箇所)。

ああ、そういうことだったのかと、あとになって分かることが確かにある。同じ日の中にも、数日後にも、何年、何十年も経ってからでも、あれが、今のこの時のための伏線となっていた、ということに気づかされて、ひそかに驚愕する、ということがあるものだ。

むなしく過ぎした年月を嘆きながらも、大切なことを取り戻すべく、喜ばしい方向転換をする、そのような時が、もしかしたら人生の終盤にふと訪れる。この説教の最初の聴き手たちにも、この本を読む人たちにも。

久野先生が、最終任地であられた函館でお忙しく厳しい本務の中を、翌日の月曜日には遺愛学院女子中高に出かけていって、学内礼拝で語られた説教である。すでに出版さ

れている説教集を読む限りにおいては、教会での主日の礼拝説教はいつも硬質で丁寧な聖書講解で、よく磨き上げられた食器に盛り付けた福音という大盛りの料理を、ゆっくり噛みしめて味わうようなものであった。が、翌日の遺愛では、25分の礼拝の中で説教は10分。そのあと授業が始まるから超えることは許されない。その短時間ですら、自分と関係ないと思った生徒は遠慮なく眠る。そこに届けようというのだから、久野先生もそうとうに試行錯誤なされた痕跡がうかがえる。説教は、厨房からそのままどこにでも配達されるような均一のものではなく、その礼拝の場ですでに食べ始めている人の顔を見ながら調理され味付けされて出されるものだ。「久野先生の願い」に満ちた30編の説教からは、これらの言葉を分かち合った遺愛の子どもたちの顔も浮かび上がってくる。

書名はイザヤ書43章がもたっていて、八番目の説教（44頁）の題でもある。神さまから自分が肯定されていることを肯定して生きる、というテーマが、短い中にも言葉尽くして語られていて、ほかのいくつもの説教の中にも、同じ音色を聴くことができる。

それにしても、10代というのはどうして、ああもシンドイものなのか。聞きたい言葉と聞きたい言葉がうなるように吹きすさぶ中を、空中分解も危ぶまれ、前に向かっていくのだから吹き回されているのだから、よくわからないままに飛んでいる。そんな感じの、めんどくさい年代だったころの私が、もしこの学内礼拝の場に居合わせたら、ものすごく無礼な態度をとったかもしれない。しかしこの説教者は、びくともしないだろう。すべては織り込み済みで語っている。後になってから分かる。それを知っているからである。

各説教のうしろに「ナビ」というコーナーがある。短いコメントがあり、有名人・無名人の言葉の引用がある。ズシンとこたえたのは、ボルフガンク・ボルヒェルトの「そのときはただひとつ！」という作品。ちょっと長い全文が135ページから載っている。根拠ある肯定に生きている人は、根拠なきものを否定できる人でもあるのだ。

これまで何度もお名前を目にしながら今更のことであるが、失礼にもお名前を勝手に、クノマキ、と読んでいた。違いました。ヒサノゾム、です。なぜそう読むのか。慎ましくも〈附記〉とされている「研究者から牧師への道へ」まで来たとき、お名前に込められた、本人にとつても大切なひとりの人の思いと祈りがあつたことを知り、ああ、そういうことだったのか、と全編を読みかえすこととなった。だから読者には、ここを最初に読むことをお奨めしたい。ひとりの人の歩みは、ほかの誰とも違う。いろんなものが突き刺さっていて、たくさんのが埋まっている。何もかも過ぎ去ったようであっても、後になってから、何もないと思っていたところに模様が浮かび、盛り上がってきてレリーフのように姿をあらわし、立像となって歩き出す、ということがあるものだ。

「神の目にあなたは貴い」。それは本当のことなんだと、わたしたちの顔を見ながら、その人はわたしたちに告げた。若い日、わたしたちはそれを聞いた。聞いたとおりの現実の中に、きょうも新しい一日を迎えて、わたしたちは生きている。

（ささき・じゅん）日本基督教団武蔵野教会牧師

（A5判変型・一七〇頁・一九八〇円・一麦出版社）

海老名弾正から見る 近代日本の宗教史と社会思想史

〈評者〉 李 元重

本書は、近代日本キリスト教史研究における「神道とキリスト教」「宗教と国家」「帝国と植民地」という三重の問題系を、海老名弾正という人物を軸に総合的に再検討した大部の研究である。本書の最大の特徴は、近年改めて照明されている海老名を、「神道理解」を媒介に彼独自のキリスト教理解と宗教思想だけでなく、社会思想を解明している点にある。

本書は全体を二部構成とし、第1部では海老名の神道理解そのものを、第2部ではその神道理解が形成した社会思想を扱う。著者は明治期日本キリスト教界における神道理解を整理し、松山高吉や植村正久らとの比較を通じて、海老名独自の立場を浮かび上がらせる。海老名は「天御中主神」や「天照大神」とキリスト教の神概念との接合を試みた。著者によれば、海老名は「宗教進化論」や自由主義神

帝国の神道とキリスト教
近代日本のキリスト教における神道理解と社会思想

洪(伊)著



帝国の神道とキリスト教
近代日本のキリスト教における
神道理解と社会思想

洪 伊杓著



学の影響の下で、日本宗教を多神教から唯一神教への発展過程として理解し、日本固有の神概念をキリスト教的ロゴス論と調和させようとした。ここから海老名の「ロゴス・キリスト論的神道理解」が形成されたと分析される。

興味深いのは、著者が海老名の思想を単純な「国家神道迎合」として片付けていない点である。海老名は確かに「国体」や「敬神」精神を積極的に評価し、神社神道の「非宗教性」論にも接近した。しかし同時に、黒住教などの教派神道にも宗教的価値を認め、それらをキリスト教と接続しようとした。著者によると海老名は、「倫理」としての国家神道のみならず、「宗教」としての神道の可能性にも注目していた。

さらに本書の重要な貢献は、海老名の思想が日本帝国主義の拡大とともにどのように変容したかを具体的に追跡し

点にある。著者は、朝鮮伝道論や「天皇帰一論」、さらには「帝国神道のキリスト教」という概念を通じて、海老名の神学が植民地支配と深く結びついていった過程を描き出す。とりわけ、朝鮮における「天照大神」の意味変化や、宗教的情熱を植民地統治に動員しようとする海老名の姿勢の分析は鋭い。ここには、日本キリスト教が帝国形成の主体の一部でもあったことが明らかにされている。

第2部では、海老名の社会思想が「大正デモクラシー」世代との比較の中で論じられる。吉野作造、柏木義円、賀川豊彦、石川三四郎らとの比較を通して、海老名の「デモクラシー」理解が、個人主義や自由を唱えながらも国家主義的・帝国主義的性格を内包していたことが指摘される。特に柏木義円との対比は印象的であり、同じ会衆主義的伝

統に立ちながら、国家と戦争への態度が大きく分岐したことが示されている。さらに賀川豊彦との論争分析では、「神の国」理解や社会主義理解をめぐる対立を通して、海老名の楽天的歴史観と帝国主義的傾向が批判的に検討されている。

本書の方法論的長所は、神学史・思想史・植民地史・宗教史を横断的に統合している点にある。海老名の神道理解が軸に据えられ、宗教思想と社会思想が有機的に接続している。韓国側の研究成果を積極的に取り込み、国際的視野から論究している点も高く評価できる。本書は近代日本思想史・キリスト教史・植民地研究を志す者にとって必読書である。

(リ・ウオンジュン)同志社大学キリスト教文化センター准教授
(A5判・六四二頁・定価七七〇円・新教出版社)

ボンヘッファーに出会う旅

宮田光雄講演録

60年に及ぶ著者のボンヘッファー研究の道程を回顧し、ボンヘッファーの今日的な意義に説き及ぶ。
また付論「ポリフォニーとしての生——ボンヘッファーにおける愛の構造」と初公開の写真資料も収録。



定価 1,100円 (税込)

エッセイの木

—本と雑貨の店—

〒980-0012

仙台市青葉区錦町1丁目13-6
エマオビル1階



022-223-2736

shop@essainoki.jp

発行：(株) CBS 仙台

従来の和解理解を超える 神学的構想

〈評者〉
長下部 穰



排斥と抱擁

アイデンティティ・他者性・
和解の神学

ミロスラフ・ヴォルフ著

彦田理矢子訳



本書は、暴力と断絶が人間関係を深く損なう現実を見据えつつ、従来の和解理解を超える神学的構想を提示する著作である。グローバル化の進展により、異なる民族、宗教、文化、価値観をもつ人々が避けがたく出会う現代において、ヴォルフは、他者への開放性を通じたアイデンティティの再構成こそが不可欠であると論じる。その中核に据えられるのが、排除でも同化でもない第三の道としての「抱擁(embrace)」である。

本書の学術的意義は、主に三点に整理できる。第一に、ヴォルフ自身が紛争当事者として経験した赦しと怒りの葛藤を背景に、和解の神学を抽象的理念にとどめず、暴力の現実に応答しうる実践的思考として提示した点である。ユーゴスラビア戦争の記憶は、暴力が人間関係を破壊する状況において、従来の和解理解がなぜ十分に機能しえな

かったのかを問い直させ、本書の議論に切実な具体性を与えている。

ヴォルフの「抱擁」は、自己を開き、他者の応答を待ち、相互的な受容へと至り、なお差異を消去せず、他者を他者として自由にする運動として描かれる。重要なのは、抱擁が他者を自己の側へ回収することでも、差異を解消して同質化することでもない点である。むしろそれは、他者との隔たりを認めながら、敵対によって断たれた関係を新たに結び直す営みである。このモチーフによってヴォルフは、和解を単なる一致や融和ではなく、差異を保持しつつ敵対を克服する関係的实践として捉え直している。

第二に、本書は、アイデンティティ、正義、赦し、記憶を相互に関連づける包括的な神学的視座を有している。アイデンティティは固定的実体ではなく、他者との関係の中

で形成されるものとされる。したがって和解は、関係の外面的修復にとどまらず、主体そのものの再形成を伴う出来事である。また、正義は放棄されず、赦しも不正の否認ではなく、暴力の連鎖を断ち切る契機として理解される。この点でヴォルフは、ジョン・ミルバンクやオリヴァー・オドノヴァンの議論と緊張関係を保ちながら、赦しと正義が相互に変容し合う枠組みを提示している。

第三に、本書は、アイデンティティをめぐる政治哲学的議論を神学の地平で展開した点において重要である。自己を保持するために他者を排除するのでも、他者に開かれるために自己を喪失するのでもない。自己は、他者に開かれることによってこそ再構成される。この点でヴォルフの構想は、倫理的責任の非対称性を強調するエマニュエル・レヴィナスの他者論とは異なり、相互性と主体性の均衡を重視している。

さらに、キリスト教精神を基盤として活動する支援団体の従事者の視点から言えば、本書はキリスト教信仰の独自性を「召しの自覚」に見出している点でも示唆に富む。ヴォルフは、キリスト者が他者より道徳的に優れていると主張するのではない。むしろ、神によって抱擁された者が、今度は他者を抱擁するよう招かれている、という理解に立

つ。キリスト教信仰の固有性は、善意一般ではなく、神の自己贈与に応答し、他者に開かれる召しを自己の生の課題として引き受ける点にある。

この理解は、現代社会においてキリスト教精神を公共的価値として語るうえでも重要である。それは、内輪の信仰用語として閉じられるべきものでも、無難な倫理的標語へと希釈されるべきものでもない。弱い立場に置かれた人々を社会の外側に追いやらず、異質な他者を同化も支配もせず、尊厳ある存在として迎え入れるための行動原理として語り直されうる。

『排斥と抱擁』は、単なる和解論ではない。他者を排除することで自己を保持しようとする人間の根深い傾向を見据えつつ、それとは異なる生の可能性を神学的に提示する試みである。抱擁とは、安易な融和でも、正義を棚上げする赦しでもない。それは、正義、赦し、記憶、そして主体の再形成を含む困難で具体的な実践である。だからこそ本書は、神学にとどまらず、国際協力、平和構築、多文化共生、宗教の公共的役割を考えるうえでも、なお読み継がれるべき重要な著作である。

(おさかベ・ゆたかワールド・ビジョン・ジャパン)
(A5判・五六〇頁・定価七九二〇円・新教出版社)

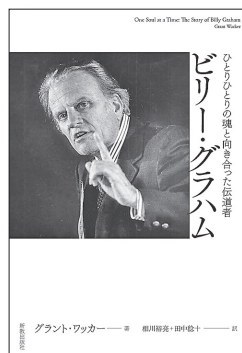
バランスの取れた評伝

〈評者〉大宮有博

二〇世紀の世界宗教史の教科書があるとすれば、「ビリー・グラハム」という人物名が出てこないはずがない。というのも、彼こそが「福音派」そのものを体現する存在だからである。そのビリー・グラハムの本格的評伝が、ようやく日本語で読めるようになった。

彼はアメリカの大都市のみならず、冷戦下の西側諸国を飛び回り、ホールやスタジアムに大人数の聴衆を集めて伝道集会を行った。彼のメッセージに触れてボーン・アゲインしたキリスト者は世界中に数多くいる。

また本書では「モデスト・マニフェスト」にも言及されている。これは、金銭の悪用、性的に不道徳な振る舞い、他の聖職者との非協力、人数の誇張といった行為を避けるというものである。多くのテレビ伝道師やメガチャーチの牧師がスキャンダルで信徒を失望させることがあっても、



ビリー・グラハム

ひとりひとりの魂と向き合った伝道者

グラント・ワッカー 著

相川裕亮、田中稔十訳



ビリー・グラハムだけがそうしたスキャンダルと無縁であつた理由は、まさにこの原則にある。

ビリーは政界にも大きな影響を及ぼした。アイゼンハワー、ジョンソン、ニクソン、レーガン、ブッシュ親子といった歴代大統領と親しく交わり、多くの重要な助言を行った。また、大統領選挙になると、どの候補者もビリーと握手をしている写真を撮らせてもらおうと躍起になった。とはいえ、彼の政治的立場はバランスが取れている（悪く言えば日和見主義的）。誰かを批判するときも相手をこき下ろすのではなく、敬意を払いつつ悔い改めを求めるものであつた。その点は、ぜひ息子さんにも見習っていただきたいところである。

本書の特徴 本書の最大の特徴は、田舎の青年から世界的な伝道者となつたビリー・グラハムの人生を、五一もの

「シナリオ（場面）」に分けて描いている点である。通常の伝記であれば、人生の出来事を時系列に並べ、細部に踏み込んで叙述するものだが、本書では人生の印象的なエピソードを切り取り、それぞれを独立した物語として提示している。これは、シーンを細かく分けて観客をスクリーンに惹きつける最近の映画の手法に似ている。この構成によって、読者はビリー・グラハムの九九年に及ぶ人生を最後まで追体験することができる。

もう一つの特徴は、叙述が畳足の引き倒しに陥ることなく、かといって批判一色でもないという点である。

人種問題に対するグラハムの対応についての叙述は、その好例である。ビリー・グラハムは人種差別に反対の立場を表明していたが、同時に南部の白人の支持を失うことを恐れ、公民権運動に対して明確な立場表明を避けた。また、南部での伝道集会において、白人とアフリカ系アメリカ人を同じ席に座らせるかどうかについても、態度が何度も揺れ動いた。著者は、このようなビリーの日和見的な姿勢を指摘しつつも、当時の社会状況を踏まえ、彼の揺れを理解しようとする。と努めている。

このようなバランスの取れた叙述のおかげで、福音派からリベラル派まで、幅広い読者に安心してお勧めすること

ができる。

著者・訳者について 著者グラント・ワッカーは、ノースカロライナ大学やデューク大学神学部でアメリカ宗教史を教えてきた研究者である。とりわけ福音派やペンテコステ派研究の領域では一級の研究者と言ってよい。また、ビリーが頭角を現した時期に青春時代を過ごした世代でもあり、彼のリバイバルの評判をタイムリーかつダイレクトに耳にしてきたはずである。ワッカーは本書に先立ち、*American's Pastor: Billy Graham and the Shaping of a Nation* (2014) を上梓しており、こちらは研究者向けの学術書である。また、ビリーに関する総合研究書 *Billy Graham: American Pilgrim* (2017) の編集者の一人でもある。これらのことから、ワッカーこそが公平な立場からビリーの評伝を著すことのできる数少ない研究者の一人であることがわかる。

翻訳者のお一人である相川裕亮は、二〇二二年に『ビリー・グラハムと「神の下の家」アメリカ』を上梓した政治思想史の研究者である。こちらも、本書とあわせて皆さんにお薦めしたい。

（おみや・ともひろ 関西学院大学教授
（四六判・五七六頁・定価五三九〇円・新教出版社）

既刊案内 (2026年4月～5月)

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
嶺 重 淑	聖書の人間像 ——人類の古典に学ぶ	A5	204	1,980	教 文 館	4/8
E. ユンゲル 著 佐々木勝彦 訳	『キリスト者の自由』を読む ——ルターと現代神学	B6	176	2,640	教 文 館	4/24
梅 津 順 一	ナショナリズムとキリスト教 ——蘇峰・諭吉・鑑三	四六	360	3,080	新 教 出 版 社	4/10
エーリヒ・バイロイター 著 梅田與四男 訳	ツィンツェンドルフの神学 ——敬虔主義の核心をめぐる	A5	424	5,390	新 教 出 版 社	4/24
本 多 峰 子	キリスト教世界が見えてくる3 悪と苦難の問題を考える ——このような苦しみを神は 許しておかれるのか	新書	216	1,540	ヨ ベ ル	4/22
石 橋 秀 雄	幼子とともに ——祈りの中の保育	四六	294	1,650	教 文 館	5/22
ヘルマン・フィッシャー 著 伊藤慶郎 訳	シュライアマハー ——その生涯と思想	四六	244	2,970	新 教 出 版 社	5/22
柴 崎 聰	石原吉郎と安西均	四六	280	2,420	新 教 出 版 社	5/25
金 子 晴 勇	キリスト教思想史の例話集Ⅳ 愛のかたち	新書	256	1,540	ヨ ベ ル	5/23
朴 清 民	主イエスと共に歩む旅路	四六	272	1,870	ヨ ベ ル	5/23

書店名	郵便番号	住 所	電 話	フ ァ ッ ク ス	U R L	メ ー ル	郵便振替
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用			02350-0-874
エッセイの木	980-0012	仙台市青葉区錦町1-13-6 エマオ1F	022-223-2736	022-302-6678	https://essainoki.jp/	shop@essainoki.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新堀3-2 千華クリスチャセンビル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimdo.com/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス東京	169-0051	新宿区早稲田23-18A/A00ビル2F(通称専門)	03-3203-4137	03-3203-4186	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	112-0014	文京区関口1-44-4京屋関口ビル日本館内(外販専門)	03-3260-5663	03-3260-5637		tokyo@nikkhan.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.tokiglobe.jp/~yokohama-js/index.html	sksch@mvva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	466-0045	名古屋市中区栄1-16 日本キリスト教団東海教会内	052-680-8090	052-680-8091	http://nagoya-seibunsha.la.cococan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
バイブルハウス京都	606-0007	京都市北区西宮町2-87 日本キリスト教団西宮教会内(外販専門)	090-5138-7020	075-320-1844		kyoto-jbs@bible.or.jp	01010-2-594
バイブルハウス堺	591-8023	堺市北区中百舌町2-87 チャペルこつじ2F	072-255-4970	075-255-4971		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
大阪キリスト教書店	552-0003	大阪市港区薄桜2-18 港ルーテル教会1F	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店(聖燈社)	591-8044	大阪府堺市北区中長尾町2丁1-18	072-254-2233	共用		sakaixx@outlook.jp	00970-0-172228
神戸キリスト教書店	650-0025	神戸市中央区港地1-45-12 神戸駅前ATビル401	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkhan.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道/西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwbt3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/matsuyama_1007/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
バイブルハウス熊本	862-0971	熊本市中央区大江4-20-23	096-372-3503	共用		kumamoto-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花4丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は 日キ販売部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

福音と世界

2026年8月号

特集Ⅱ宗教と人権

寄稿者Ⅱ 月本昭男、上村 静、空閑厚樹、
丹羽宣子、浅井春夫、結城俊哉

◆書評『帝国の神道とキリスト教』（山口陽一）
◆書評『祈りのアナーキー』（マニエル・ヤン）
◆連載『ズレになるまに』（川口弾、古代イスラエ
ル史入門（日高貴士耶）、人物・日本キリスト教
史（戒能信生）、ばやし牧師のさすらい説教録（富
田正樹、ルカ福音書（山崎ランサム和彦）他

A5判・定価660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyō-pb.com

編集室から

る。

ただこのワールドカップについて、知人のあるクリスチャンが述べた言葉が今も記憶に残っている。

「人が必死になっている様を見世物にするのは野蛮だ」

古代ローマの「パンとサーカス」、特に殺し合いすら見世物にしていたことを念頭に言われたものだったが、現代のスポーツ競技等のショービジネスにおいて実際に血が流れることはほばないといえ、その競技現場や取り巻く環

本原稿はワールドカップ・サッ

カーの話題で世間が大いに盛り上がっている中で書いている。「国威をかけた戦争」と言われることもあるこの大会で、参加選手やスタッフは文字通り死力を尽くして闘ってい

予告

本のひろば

2026年9月号

本・批評と紹介

（巻頭エッセイ）佐藤真史

（書評）柴崎聰著『石原吉郎と安西均』、本多峰子著『悪と苦難の問題を考える』、E・ユンゲル著『キリスト者の自由』を読む、金子晴勇著『キリスト教思想史の例話集Ⅳ 愛のかたち』、吉田亮編著『占領期日本の教育再建と越境キリスト教』、J・デイヴィース著『パウロと黙示』他

境において人の「いのち」や尊厳が損なわれる危険が未だ皆無ではないことは、覚えておいて良いと思う。

「パンとサーカス」を直接批判する文言は聖書にはなかったと思うが、「イエスはどうか」というのは、クリスチャンとして常に考えておくべきことだろう。自国の勝敗はともかく、大会がつつがなく終わる関係者が無事に帰還することを祈りたい。（村上）

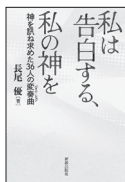
※訂正とお詫び

前号7月号巻末の次号予告において、今号掲載の『活けるキリストの現実』の著者を誤って「藤掛順一著」としましたが、正しくは「近藤勝彦著」となります。著者と書評執筆者を取り違えて掲載してしまいました。訂正してお詫びいたします。

私は告白する、私の神を

長尾 優 著 神を訊ね求めた36人の変奏曲（バリエーション）

多くのキリスト教書を装幀してきた人気デザイナーが、辻邦生、スズノガ、リルケ、山本周五郎、アーレント等々私淑する36人の先達を選び、既成の宗教の枠に収まらない彼らの屈曲に満ちた求神の道のりを、共感をこめて綴ったワッセイ集。 四六判・定価2420円



滝沢克己 インマヌエルの風景

小林孝吉 著 キリスト者の生涯と希望の思想

インマヌエルの原事実に着目し、自由と希望を追求してついに独自の純粹神学に到達した神学者。その人生と思想を描き切った力作評伝。 四六判・定価3850円



シュライアマハー その生涯と思想

ヘルマン・フイツシャー 著／伊藤慶郎 訳

批判版全集と近年の研究成果に基づき、伝記上の重要な出来事、および神学と哲学に及ぶ膨大な著作の全体像を概観する最新の入門的評伝。 四六判・定価2970円



ビリー・グラハム ひとりひとりの魂と向き合った伝道者

グラント・ワッカー 著／相川裕亮、田中稔十 訳



イザヤ書註解Ⅲ 28—39章

ジャン・カルヴァン 著／堀江知己 訳 待望の続刊。全5巻。

A5判・定価7920円

ナシヨナリズムとキリスト教

梅津順一 著 蘇峰・諭吉・鑑三 平民主義と帝国主義の相克。四六判・定価3080円

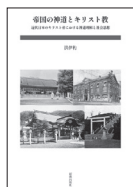
帝国の神道とキリスト教

近代日本のキリスト者における神道理解と社会思想

大反響

洪伊杓 著 神道とキリスト教の融合を図った海老名弾正の思想構造を詳細に分析するとともに、当時の社会思想への影響も丹念に辿る。現代日本のキリスト者にも大きな問題を提起する労作。

A5判・定価7700円



七十人訳ギリシャ語・ 哀歌の和訳

原典ヘブライ語と
七十人訳の比較分析

小河信一「著」

話題の新刊



国家存亡の危機の時代に生み出されたヘブライ語のアルファベート詩「哀歌」。七十人訳ギリシャ語に移し替えられた時、それはどのように変容していったのか。聖書翻訳の限界を探究することが真の叡智と人間理解への最良の手引きともなり得ることを渾身の和訳を通して明らかにする。

A5判上製・一四四頁・一九八〇円

大韓聖公会 全国女性聖職者会「著」代表執筆…朴美賢

私たちの司祭

関澄子「訳」

共に歩き出す女性たちの道

反響！



韓国聖公会の歴史において女性が按手礼を受け司祭となるのはまさに茨の道……歴史と宣教の主体である女性たちによって綴られた現代韓国の教会史。

四六判・二二四頁・一八七〇円

岩本遠億「著」ルカの福音書説教集 4
完全な愛が現れた・人は悪魔に勝った



全4巻完結

「目から鱗」ってこういうことなんだ！愛する力、自分自身を離れて一人の人を愛するいのち、それこそが聖霊！新書判・二〇〇頁・一三二〇円

神の子、イエス・キリストの福音
松木充「著」



聖書を原語で味わい、文脈を読み、テキスト独自の視点を大切にする。何よりも御言葉の前に自らを立たせ、ひれ伏すようにして深奥のメッセージを探り、自分を探らせる。マルコ福音書説教の全体像を完成。

四六判・四一六頁・一九八〇円

遠藤周作が森田ミツに語らせた神学

田矢廣司「著」

反響！



寂しさと痕跡を通して語りかける神。その足跡を遠藤文学に訊ね、イエスの現れを追い求める……。

四六判・一九二頁・一八七〇円



ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp https://yobel.co.jp 出版の手引き / 呈 (税込)

〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858

本のひろば.com



一九五七年七月一七日 第三種郵便物認可
二〇二六年八月一日発行 (毎月一回一頁発行)
本のひろば 第八二四号 二〇二六年八月号

発行所 〒112-0014 東京都文京区関口一 四四一四 一般財団法人キリスト教文書センター
電話〇三三・一六五二〇 振替〇一七〇五一一六七九
発行人 金子和人 編集人 村上信児 印刷所 モリモト印刷(株)
発売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話〇三三・二六〇一五六七〇

定価七八円 (税抜七一円) (〒63円)
一年分二二〇〇円 (送料共)